

## 今週のメニュー

## ■トピックス

◇「塩ビの正しい理解、良さの再認識により、需要の拡大へ」

—宇田川会長 VEC総会後の懇親会にて挨拶—

## ■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(6)

木下 清隆

## ■編集後記

## ■トピックス

◇「塩ビの正しい理解、良さの再認識により、需要の拡大へ」

—宇田川会長 VEC総会後の懇親会にて挨拶—

5月20日に塩ビ工業・環境協会 第18回総会・懇親会を開催しました。懇親会には官庁、報道関係、関係業界などの方々にご参加いただきました。冒頭、宇田川会長は、塩ビの正しい理解、良さの再認識の一層の普及促進を図り、需要の拡大へつなげるべく活動していくと挨拶しました。続いて、来賓の経済産業省製造産業局 谷審議官から祝辞をいただき、亀高副会長の発声で乾杯のあと、歓談に移り、盛況のうちに終了しました。

以下に、宇田川会長の懇親会での挨拶を掲載いたします。

本日は皆様ご多用中のところ、多数ご出席を賜り、誠に有難うございます。

ご列席頂きました、経済産業省の谷審議官様をはじめ関係官庁の皆様、マスコミの皆様、塩ビ製品業界や商社の皆様、さらには日頃より塩ビ産業に様々なご支援をお寄せ頂いております皆様におかれましては、平素より塩ビ工業・環境協会の活動へのご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。



宇田川会長

会長就任以来一年が経過しましたが、この一年は、消費増税前の駆け込み需要の反動からのスタートとなり、9月頃まで消費が低迷し長引いたものの、後半以降の円安、原油安の影響から株価上昇、雇用や所得環境の改善など景況感の好転も窺える状況となりました。こうした中、平成26年度の塩ビ樹脂の国内出荷は103万トンと前年の109万トンを下回り前年比94%となりましたが、後半の円安影響により輸出は38万トンと前年比112%の伸びを示し、総出荷量では141万トン、対前年比98%となりました。国内外の回復基調を反映して、今後の総出荷量は伸びていくものと見ております。



谷審議官



亀高副会長

さて、弊協会は、これまで、客観的なデータをもって塩ビの誤解を解くことにつとめ、合わせて塩ビ製品のすぐれた環境特性について広くご理解いただくよう情報発信等を行って参りました。昨年、この場でGPNガイドラインの塩ビの情報提供項目が削除されたこととお話ししましたが、こうした事実も一助としてこの活動を進めてまいりました結果、塩ビを新たに使用するうえでの問い合わせが増えるなど、塩ビの良さが再認識されていることが実感できるようになってきています。今後も引き続き塩ビの環境性能についての正しい理解の普及促進をはかり、未だに残っている塩ビを忌避する規格やガイドラインなどの見直しを進めてまいります。

今年度開催のPVCデザインアワード2015は、より優れた作品が出てくるよう、昨年よりは早めに説明会を大阪、名古屋、東京にて開催したところ、多くのデザイナーの方々にお集まりいただき活発な質疑がありました。素材メーカーや卸の方々のご尽力で、生地見本も100点近くと大幅に増えています。デザイナーの方々との連携とサプライチェーンの連携を一層深め、業界の活性化をはかり、素晴らしい塩ビ製品が創出され、そして商品化にむすびつくよう積極的に取り組んでまいります。

昨年、リサイクル支援制度では、新規案件である壁装協会の「塩ビ壁紙のリサイクルシステム開発案件」を採択しました。引き続き、管・継手や農ビ、タイルカーペットなどのリサイクルの促進に努めるとともに、これまでは困難であった製品のリサイクルの可能性をさらに広げるべく、リサイクル手段、技術開発を関連業界、事業者と連携して進めてまいります。

樹脂窓については、建材トップランナー制度などの施策を背景に、国内主要サッシメーカーが樹脂窓を主力商品として上市し、その断熱性能を競う状況となりました。税制の優遇措置や省エネ住宅ポイントなどにより進展が期待されます。今後は、この樹脂窓を含め塩ビ建材の普及とさらに新しい動向の調査について、建材メーカーや関連団体と連携、協働し進めて参ります。

工場の環境と保安対策、化学物質管理については、行政、関連諸団体の皆様と連携、またご協力を得、会員各社で知識・経験をしっかりと共有し、今後も最優先で取り組んで参ります。

最後に、本日ご列席の各社の事業の益々のご発展と、ご参集の皆様のご健康、ご多幸を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(6)

木下 清隆

<前回とのつながり>

前回までに岡田氏の伊勢神宮と天照大神に関する所説の紹介をしたので、今回からは、その他の専門家の天照大神に関する諸説を紹介することにする。

3. 天照大神についての諸説

天照大神は大ヒルメから誕生した女神であり、その時期は天武朝であるとするのが岡田氏の主張であるが、このような考え方に対し、他の専門家はどのような見解を持っているのだろうか。以下にその幾つかを紹介することにする。

先ず、津田左右吉についてみて見よう。氏は、『日本古典の研究上』(岩波書店、一九四八)の中で天照大神おほひるめむちと大日靈貴おおひるめむちに関し、次のように述べている。



伊勢神宮 内宮 宇治橋

「アマテラス大神といふ名の如きは、日の属性を説明したものであるから、それは知性の所産であり、知識人の考慮によってつけられたものであることが、推知せられるが、オホヒルメもまた同様であらう。」(三七三p)  
「日の神に人の性質と形との生じたのは、日が皇祖とせられたためであったのではあるまいか。純粹の宗教的意義に於いての民間信仰の対象とせられている日は、後までも依然として精霊もしくは靈物としての日そのものであって、アマテラス大神またはオホヒルメの命といふ名を有する人の性質と形とを具えた神ではないからである。また上にも一言した如く、アマテラス大神またはオホヒルメの命といふ名が、決して古くから伝へられて来たものではなく、後になって知識人の思想の上に生まれたものらしく考えられるからである。」(三七九p)

と述べている。要するに、津田は、日そのものは民間信仰の対象であったが、この日の神が皇祖とされたことで、人格神となり後からアマテラス大神とオホヒルメの名が生まれてきたとしている。更に、日の神について、

「日の神を皇祖神とする最初の企画が、民間信仰において日を最高の神としてみただと見ることは、困難であらう。それよりも寧ろ日が天にあって此の国土を照らすといふ自然界の現象と、皇室が此の国を統治せられるといふ政治形態の上の事実との間の並行を認め、此の二つを結びつけて皇室を日に擬したのであって、そこから日そのものとしての日の神が皇祖神とせられるようになった、と解すべきであらう。」  
(三七七p)

と述べて、日が天にあって国土を照らすことと皇室がこの国を統治することの類似性から、日の神が皇祖神となった経緯が説明されている。このような津田の日神皇祖神説を岡田氏は守護神の形で継承していることになる。また、日の神の性については、

「然らば皇祖神としては日の神が男性であるべきか女性であるべきか、それが問題である。そこで先ず皇祖といふことを考えるに、家々の祖先が男として記されてゐることを思ふと、皇室の御祖先もやはり男神であるのが自然のやうである。」(六一九p)  
「なほヒルメの「メ」が「女」の義でないことは、神の名の多くの例からも知られる。…… 神武天皇以降の皇族にも「イラツメ」といふ称のついてゐるのはあるが、単に「メ」としてあるのは一人も無い。また普通名詞にしても、織女とか醜女とかいふ話はあるが、高貴の人を指すには「メ」といふ語はつかないやうである。… だから、最高の神たる日の神を、女神としてヒルメといったとは、思われぬ。」(六二三p)

と述べ、皇祖神男神論の立場を取り、ヒルメという名称だけから、これを女神とすることはできないことを論じている。津田の場合は、男神日の神がアマテラス大神と名付けられたとの立場に立っているために、基本的に日の神が皇祖神であることに変化はなく、ただその名称が天照大神に変わっただけということになる。岡田氏の場合は、女神天照大神が巫女神から昇格し、更に日神の座を奪った形となっており、津田説とは異なっている。大王家の守護神の座を追われた日神はその後どうなったか、の問題が出てくるが、この神については先にも触れたように伊勢神宮の荒祭宮にひっそりと祀られていることになる。

次に、直木孝次郎氏の場合を見てみよう。氏は戦後間もない昭和二十六年に「天照大神と伊勢神宮の起源」(『日本古代の氏族と天皇』塙書房、一九六四、所収)を世に問い、新しい時代における天照大神・伊勢神宮問題の一つの考え方を提示した。氏の所説の要点をまとめると次のようになろう。( )内、筆者注



伊勢神宮 内宮 参道

- ① 天照大神は皇室の氏神であり、皇室の祖先神である。従って天照大神について研究するに際しては、まず氏神および祖先神の性質についての考察から始めるべきであろう。
- ② 氏神とはその氏が信仰する神、もしくはその氏を保護する神であって、守護神・守護霊と呼ばれるものである。従って、これは氏の祖先あるいは祖先神ではない。氏神は本来祖先神ではなかったが、後になって氏神を祖先神とするか、祖先神を氏神にするといった変化が起きた。このような変化が起きるための要因として人格神の觀念の発展が必要であるが、祖先神が氏の神とされるようになったのは、白鳳時代以降と考えられる。ところが記紀は皇室のみ、祖先神である天照大神を古くから氏の神として祭祀していたことを伝えている。これは以上のような考え方に反するものであり、検討の必要がある。  
(ここの論理は少し難しい内容なので例を挙げて説明する。例えば、ある氏族が一族の守護神として、穀神としての素戔鳴尊を選択したとしよう。当然、五穀豊穰を願って日々素戔鳴尊を祭祀することになる。しかし、この素戔鳴尊はこの氏族の先祖或いは祖先神ではない。ところが長い年月が経つとこの一族は、素戔鳴尊こそ自分達の守護神であると同時に、祖先神であると見なすようになる、といったことが起きた。また、別のケースでは、自分達の大昔の祖先が、その武勇伝或いは偉大なる功績と共に伝承されていた。ところがこの祖先がその後、一族の中で先祖神と見なされるようになり、

更に氏神或いは守護神に昇格する、といったことが起きた。後者の場合は白鳳時代以降になってこのようなことが起きたが、皇室のみは祖先神である天照大神を白鳳時代以前から氏の神、即ち、守護神として祭祀していたと伝えられている。これは、論理に反する、といった内容である。)

- ③ 日の神は元来皇室の氏の神として信仰されていたが、大化前後に皇室及び天皇を崇拝・畏敬する念が高まり、さらには「天皇現神観」も生まれ、この時期に皇祖神信仰が成立した。このことで日の神と天照大神とが同一視されたこともあり、日の神にして皇祖神という、二重の神格を備えた天照大神の信仰が完成することになる。
- ④ 天照大神が大和から伊勢に遷祀されたのは、皇室の氏の神である天照大神が皇室の発展に連れて国家的な神として祭祀されるようになったからと考え、この遷祀伝説を歴史的事実として理解しようとする説があるが、この説には従うことが出来ない。大化前後において天照大神が国家的な神として信仰されたとする証拠が記紀には無く、また、一般に国家神の観念がこの時代に存在したとは考えられないからである。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)  
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

## ■ 編集後記

岡山の私の家の庭に10年前に植えたデコポンの苗木が順調に育ち、今では高さ2m程の高さになっており、ここ毎年50-70個ほどのデコポンが実ります。おかげでデコポンをお店で買う必要がありません。ちょうどこのゴールデンウィークの頃につぼみをつけますが、この時期アブラムシが群がり一部のつぼみの周りが真っ黒くなります。しかし、今ではもういません。アブラムシのそばには長さ5-8mmの小さな黒っぽい虫がいてこれがアブラムシをパクパク食べています。この虫は実は天道虫の幼虫でありがたい虫なのです。間違っても害虫がいると言って駆除してはいけません。この虫のおかげで毎年デコポンが沢山おいしくいただけることを考えると、この小さなてんとう虫に感謝です。

(ももった)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)